柳巷花街へも。日々下雛を呼よる。亭を
下総の裏面に。㊂の焼印打まを何卒
御贔屓あつく。千代も八千代も相変らぬ御贔屓
有て。素くも当町内の老舗の内へ店を並べ。
株ある真島屋と云字号にて園主
もろく太鼓を打くも程遠からぬ明治生まて

竹栄真水記

一 千代田の追善（下総）を
壱里合邀入て調製仕り

東京市日本橋通
元大坂町十三番地
千代田下総発売元
真島商店

當月　日売出し
毎月第三日曜上仕候

放れ鳥渡捨ゆく御催しも。調子を合せて主人が注意に。
届く心の衣紋竹。含むも露さく菜の艶に。笠仙染の
貸浴衣。風入のよき間毎を。料理書画の小集
頼講渡何でもかでも一時に。段打際の色見程。澤山茲へ
打寄の土地の名主人も。蠣売町。追手に真帆の入船を。
汲道立て願ふになん

竹栄真水

五号

安直 徳兵衛料理開業御披露

二号字　三号。入ル

尾上梅寿が御家狂言天竺徳兵衛昔噺。今も五代目
菊五郎が観客方の御贔屓受。世に天徳と言傳へり。
其徳兵衛とこし事替り是も同家に年久しく水門なる
勝手口又も湯殿の水船から楽屋を働らく男衆にて。
切を経よる大蟇も満水にかゝる世の習ひ。ふれし彼も
相引の。糸に等しき肺病に。火炎にあらぬ青ひ息。
見出ても始終木琴より。借金登夏が名乗りし久兼てに
官もあらざれば。去だ御晒頂戴かし麻布の古巣へ
まで元年業ある料理